

# 平成22年度病害虫発生予察特殊報第4号

平成22年10月19日  
愛 知 県

1 病害虫名：キュウリホモプシス根腐病 (*Phomopsis sclerotioides* Kesteren)

2 対象作物：キュウリ

3 発生地域：西三河地域

4 発生確認の経過

平成22年2月、西三河地域の施設栽培キュウリにおいて、地上部が萎凋し、根部が褐変腐敗する被害が発生した。被害根を調査したところ、細根が腐敗脱落し、表面に黒点を確認した。愛知県農業総合試験場で調べたところ、被害根から同種の糸状菌を高率で分離し、その菌を*Phomopsis sclerotioides*と同定した。同定した菌と病徴から、発生した病害を本県では未確認のキュウリホモプシス根腐病と診断した。

本病は、昭和58年に埼玉県で初めて発生が確認され、以降、福島県、群馬県、神奈川県、岩手県、宮城県、山形県、秋田県、長野県で発生が確認されている。

5 病徴

発病初期は、晴天の日中に萎凋（図1）、朝夕や曇雨天日には回復する症状を繰り返し、下葉から徐々に枯れあがる。萎凋症状を呈した株はやがて枯死する。収穫初期から萎凋症状がみられる場合が多い。根の初期症状は比較的軽く、細根の脱落と細根の発生基部の褐変が認められる（図2）。症状が進行すると主根や支根全体が淡褐色ないし褐色になって腐敗する。枯死株の根には、本病に特徴的なチェッカーフラッグ様の不整形微小黒点（疑似微小菌核：図3）や不整形黒色斑点（偽子座：図4）が形成される。

6 病原菌と伝染

糸状菌の一種で、不完全菌に属する。培地上では分生子殻と分生子を形成するが、被害植物上での形成は確認されていない。

病原菌は被害植物の残さとともに土壌中に残存し、伝染源となる。

土壌中において、病原菌は地表から30cm下までに多く分布する。

病原菌の生育適温は24～28℃であるが、発病適温はこれより低温域である。

キュウリ、スイカ、メロン、カボチャ等のウリ科作物全般を侵す。

7 防除対策

育苗には消毒済みの培養土など病原菌が存在してないものを使用する。

被害株は、早期に抜き取り適切に処分する。その際、根を残さないよう注意する。

本病の拡大防止のため、地上部に明瞭な萎凋症状が見られない場合でも、収穫終了後、根に症状がないか確認する。

無病圃場への汚染防止のため、本病が発生したほ場の作業は最後に行い、使用した機具に付着した土壌を他の圃場に持ち込まないよう注意する。

本病原菌は比較的熱に弱く、地温を一定温度（38～40℃で24時間、42℃で6時間、44℃で3時間または46℃で1時間等）に保つと死滅するので、夏季に太陽熱処理による土壌消毒を行う。

発生を確認したほ場ではクロルピクリン剤等により土壌消毒を行う。

8 連絡先

農業総合試験場環境基盤研究部病害虫防除グループ

電話：0561-62-0085（内線471）



図1 地上部の萎凋症状



図2 根の黒変症状

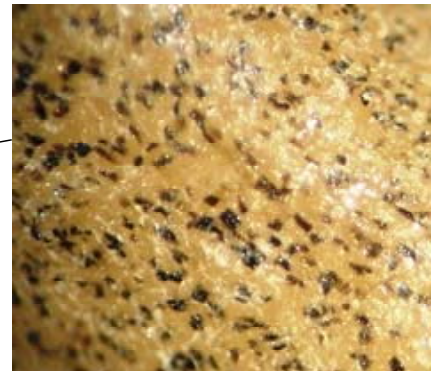


図3 疑似微小菌核（根の表面の不整形微小黒点）



図4 疑似子座（根の表面の不整形黒色斑点）